

これからの滋賀大学経済学部

わくわくする経済学部へ

入江直樹 / 滋賀大学 教育・学生支援機構 特命教授

卒業して32年が経った2016年に就職担当の特任教員として再びこの彦根に戻ってきた。街の風景や大学校舎には当時の面影もあったが体育館やグラウンドは様変わりしていた。自転車で30分かけて通った八坂グラウンドは滋賀県立大学となっていた。体育館は大学構内にあり、旧体育館跡地にはテニスコートがある。ただこの彦根の空気感と市民の方々の温かさは変わらない。私が家庭教師をしていた北野神社のご長男は立派な神主、アルバイトをしていた鳥源の子供たちは「すぎもと」「サンバーガー」の経営者となっている。昔同様にふらりと訪ねて顔を見て少し話して帰ってくる、そんな毎日を送っている。何年たってもこの彦根と滋賀大学は私にとっては安心できる安全な場所である。組織としての経済学部は大きく変化してきた。卒業した昭和59年は経済学科、経営学科、会計学科、管理科学科の4学科、卒業時の学生数は312名であった。今は経済学科、ファイナンス学科、企業経営学科、会計情報学科、社会システム学科の5学科となっている。そして今年からは総合経済学科のみとなり、3年次に希望する専門領域を選択するようになった。また入学方法も当時は共通一次試験を受けて、その後の二次試験で入学する方法であった（一部二次募集で入学した者もいた）。今は大学入学共通テスト後の前期日程、後期日程からなる一般選抜に加えて学校推薦型選抜、総合型選抜と入学方法も増えた。男女比も当時と比較して女子学生が大幅に増えている。このように枠組みが大きく変わっても変わらないのは目指すべき方向と志である。「国際的な視野をもち、環境に配慮しつつ地域社会にも貢献できる、個性ある専門職業人の養成」という学部理念に基づき教職員と学生が奮闘していることを肌で感じている毎日である。

今後、滋賀大学経済学部の果たすべき役割は、学問を究めること、人を育てること、そして文化を育むこと、この三つであると考え。

学問の探求は大学にとって最も重要で、今はその成果が大学の成果とも言われている。一人一人の教員から湧き出てくる成果、業績を最大限にするために職員も徹底的にこれを支援する、このつながり、団結が組織成果を最大限なものにする。教員自らが

常に自らの課題に向き合い思考し、その成果を伝える、知らしめる、この繰り返しが経済学部のステータスをこれまで以上のものにしてけると確信している。以前、前職で関わりのあった大学医学部教授から「私のサイエンスに力を貸してくれ」と言われたことがある。徹底的に突き進む、これこそが大学に籍を置き研究業務に努める者のあるべき姿なのではないかと思う。

大学教員は講義や演習で学生と直接関わることを常としている。講義においてはこれまでの義務教育や高校教育と違い、学生の学びたいという姿勢、意欲がなくてはならない。講義に出席するしないが学生の意志に依る。ただ今の学生は周囲から十分すぎるほどの環境を用意され、してもらうことが当たり前となっているが大学はそうではない。この教員は何を伝えたいのか、何を教えようとしているのか、を考え抜いて毎日の講義に出席する必要がある。そこを怠ると面白くない時間を過ごすことになる。ただ少しだけ教員が学生に歩み寄ると学生との距離は一気に近いものとなるが、この程度は難しい。演習において学生は教員の言葉、考え方をコピーしているようにも思える。これは就職相談に来た学生と話していても実感することである。教員の行動、振舞い、言葉は想像以上に学生に影響を与えている。これが教員としてのやりがいの一つかもしれない。

このような教員、職員、学生の行動、思考は100年の有史の中で育まれたもので、ここから多くの人材と多くの成果が生み出されてきた。この枠組みが我々にとって大きな財産になっていると思う。外部環境が大きく変わり、その変化の速さも日増しに早くなり、昨日の新しい知見・情報が今日には既知で古の話となってしまつ中で我々がいかにブレることなく日々の研究、教育に邁進していくか、これが重要なのではないだろうか。世の中で人々が暮らしている上で経済学は不可欠な学問で、それをこの彦根で究め伝えていく、この原点を常に意識しながら毎日を学生と共に過ごす、これこそがこれからの滋賀大学経済学部のあるべき姿なのでは思う。